

ラフィア繊維の布とかご

福田笑子（植物リサーチクラブ）

はじめに

現在、自然素材が注目される中、軽くしなやかな素材の特性により、ラフィアはラッピング用のひもや、帽子・バッグの材料として利用されている。私は、川島テキスタイルスクールのワークショップにて、小西誠二先生に「ラフィアのかごづくり」を学び、それ以来染色したラフィアで作品づくりを楽しんでいる。この度ラフィアという植物や、自生地アフリカでのラフィアの使用法・役割について知識を深めたいと思い、以下の項目について調査した。



写真1 ラフィアヤシ

1 ラフィア

ヤシ科植物。ラフィア属は、約20種からなり、中米・南米、アフリカ、マダガスカルが原産。熱帯雨林の周辺などに生育する。

ラフィアの得られる *Raphia farinifera* は、幹の高さ 9 m、羽状葉は長さ 15~18 m、幅 3 m で、ほぼ真っ直ぐ上に伸びる。葉の表面は緑色で裏面は白っぽい（文献 ①）。

2 ラフィアの繊維ができるまで

ラフィアヤシの繊維は、若い葉だけを利用する。まだ開ききらない葉を、ヤシの木に登って葉軸の上のほうから採る。摘み取られた葉は、長さを揃えて、畳み込まれた葉の先端のほうを開き、葉裏の柔らかい部分に小刀を当て、上面の表皮だけの状態にする。その後、得られた半透明の繊維を天日に干し、手の爪や専用のくしを使って細かく裂き、長さ 1 m ほどの繊維の束とする（文献 ②）。



写真2 表皮を剥いている様子



写真3 屋根に干されたラフィアの束

3 ラフィアの布

草ビロード

クバ王国ショワ族の「草ビロード」と呼ばれる布は、ラフィアヤシの平織りの布にラフィア糸を刺繍して幾何学模様を描き出したものである。かつては妊娠中の女性の仕事であったとされている。最近では、工芸品として男性も作るようになっている。

刺繍の技法は、平織りの表に出た目を撚りのない普通のラフィア糸でひとつずつ拾うミシンと呼ばれる単純な刺繍と、同じく目をひとつ拾って細かくほぐした糸を通し、それを1、2ミリの長さに切る、ランバットと呼ばれる技法の二つが組み合わされている。1、2ミリの切り揃えられた糸が一定の面の広がり埋めると、ビロードと同じ効果が得られる。それが「草ビロード」の名の由来となっている（文献②）。

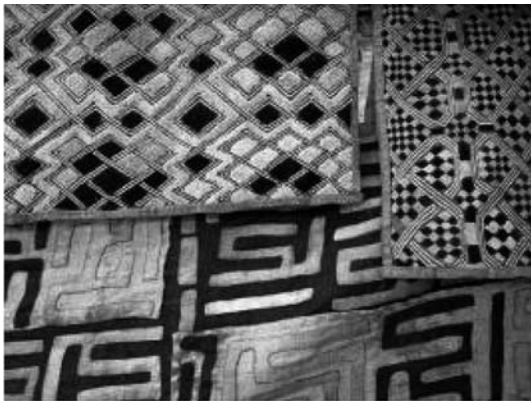


写真4 草ビロード



写真5 草ビロードとコンゴの女性

ンチャク

コンゴ共和国クバ王国では、埋葬用の死装束としてアップリケを施したンチャクを作っている。女性用のンチャクは男性用のマフェルとは対照的に、裳布の布面に現世的な地位のルールなどには束縛されない、奔放でさまざまな表現の場を提供しているように見える。本来は布をなめす作業のなかでできてしまう穴や、たびたび着用するうちに生じてしまうほころびをふさぐものであったはずの当て布は、クバの女性達の手で独特のアップリケの技法に発展させられ、これがンチャクの基本的なデザインとなった（文献②）。縦横無尽に展開する丸や線の組み合わせに、迷路をみているようなユーモラスさを感じる。

一方、カメルーンのティカール族では、社会的地位を示すため、ラフィアで作られた袋を持つ。また、袋の口縁部の両端の3～4cmに色鮮やかな短い房がある小振りの手提げ袋は、青年が妻を迎える際に、婚約者の両親に小銭やパームオイル、魚、塩などを入れて贈るものである（文献③）。

このようにラフィア布は、アフリカの一部の民族にとって、生死や婚礼に関わる儀式で用いられるなど、社会的階級を示す特別な布としての役割を担っている。



写真6 ンチャク

4 ラフィアのかご

アフリカでは、その地域に自生する草木を利用し、かごづくりが行われている。ラフィアもその素材のひとつで、かごやざるづくりは通常女性の仕事とされる。道具は針などのシンプルなものがあれば、かごを作ることができる。そのためクラフトの歴史の中でも、かごやざるは早い時期につくられたといえる。アフリカの編みの技法は、最も古くからある「巻き上げ編み」(コイリング)が多く使われている(文献④)。巻き上げ編みとは、芯に渦巻き状に繊維を巻きつける技法で、底から編みはじめ、径や高さを編みながら調節でき、すきなところで終わることができるのが特徴といえる。また、バッグなど柔らかく仕上げるものには、「絡み編み」(ルーピング)と呼ばれる技法を用いる。前列の連続する小さな輪に糸を絡めていくことで、形づくられている。

技法を変えることで、同じラフィアの繊維から、異なる表情・手触りの品が生まれる。ラフィアのかごが観光用として注目が集まるようになってからは、さらにデザイン性、実用性、美術性にと工夫が凝らされている。



写真7 ラフィアのバッグ



写真8 ラフィアのかご

謝辞

写真の掲載にあたって、二宮まゆり氏(写真1)、文献②の著者渡辺公三氏(写真2,3,6)、文献④の著者白鳥くるみ氏(写真4,5,7,8)にそれぞれ許可を得たことを記して感謝する。

引用文献

- ① 仙頭照康(1989) ラフィア属. 所収:相賀徹夫編,園芸植物大事典. 5:128. 小学館,東京.
- ② 渡辺公三・福田明男(2000) クバ王国のアップリケと草ビロードアフリカンデザイン. pp. 12, 14, 16, 18, 19. 株式会社里文出版,東京.
- ③ 井関和代(2000) アフリカの布ーサハラ以南の織機・その技術的考察. p. 89. 河出書房新社,東京.
- ④ アフリカ理解プロジェクト編(2007) 見る・作る・知る おしゃれなアフリカ4 アフリカアート&クラフト. pp. 5, 21. 株式会社明石書店,東京.